根本説一切有部律にみられる龍について

伊藤堯貫

はじめに

密教では、旱魃の時、雨を祈るための修法があり、請雨法や祈雨法などと呼ばれる。この請雨法には、『孔雀経』に基づく孔雀経法や、『請雨経』に基づいて修す請雨経法などがある。請雨経法においては、龍王を勧請して雨を祈る。弘法大師空海は、平安京に作られた神泉苑で、この『請雨経』に基づく請雨経法を修し、雨を降らせたことが伝えられ、また仁海は、この法を九回修して、みな霊験があったことから雨の僧正と称せられたことが伝えられている。

龍とは、おもに海や池などの水中に住し、雨や雲をつかさどり、古来よりインドでは、暴風雨をもたらすものとして、恐れられると同時に、また恵みの雨をもたらすものとして信仰もされた。

仏教においても、龍は初期の仏典をはじめ大乗経典、密教経典など多くの経典に登場し、仏教の守護者などとして描かれている。

本論文では、このような龍について考察する一助として、大乗仏教や密教とも関係の深い根本説一切有部の律典を中心に龍の特徴を概観してみたい。

一、仏伝の重要場面に登場するナーガ

仏伝における重要な場面において、龍が重要な役割を果たしていることはすでに論じられている。[1] 根本説一切有部の律典においても、釈尊の誕生、成道などのその生涯の重要な場面に龍が登場する。

（一）龍王灌水

釈尊が誕生するとすぐに、帝釈天が捧げた蓮華の上を七歩歩いて、遍く四方を見て、自分のこの生は最後の生であり、「天上天下唯我独尊」と述べる。すると、梵天は傘を捧げ、帝釈天は払子を持った。龍王は、虚空より温かい水と冷たい水によって釈尊を灌水した。[2]

（二）乳粥供養の宝鉢

釈尊が苦行を捨て、成道するために菩提樹に座そうと向かう前に、二人の女性から乳粥の供養を受ける。釈尊が乳粥を食し終わり、その鉢を尼連禅河に投げると、龍王はその鉢を受けて龍宮に入った。帝釈天はこれを見て、金翅鳥となって龍宮に行き、龍王を驚かして鉢を奪って、三十三天に鉢等を建てて供養した。[3]

（三）菩提樹に向かう釈尊を讃歎する。

尼連禅河にカーリカ（kālika）龍王が住していた。この龍は盲目であるが、仏が出生するときには目が開き、仏が滅するとまた盲目に帰る。カーリカ龍王は、大地が震動しているのを聞くと、仏が出生するのかもしれない

と思い、龍宮より出てくると、三十二相八十種好があり、千個の太陽の如きの輝きを持つ菩薩を見る。そして、龍王は、かつて成仏の威徳をそなえた菩薩を見たが、今この菩薩もまったく相違がないから成仏は疑いがないと讃歎し、その姿形や、周囲の奇瑞により成仏すること疑いないと讃歎する。(4)

（四）　ムチャリンダ龍王の庇護

菩提樹下より起った釈尊は、ムチャリンダ（mucalinda）龍王の池に行き、一樹下に座して三摩地に入った。その時、ムチャリンダ龍王は七日間雨が降り止まないことを知り、池より出てきて、釈尊のまわりを七重にとぐろをまき、頭によって釈尊の頭を覆い、釈尊を暑さ寒さや、蜂や蠅などから守った。七日の後に、とぐろをといて、天の姿になって釈尊を頂礼した。(5)

（五）　舎利八分

釈尊が涅槃に入り、荼毘に付すとその遺骨である舎利は八分された。そのうちの一分は、ラーマガーマのコーリヤ族が獲得した。この八分された舎利によって八つの舎利塔が建てられた。そのうち、七つは贍部洲にあり、一つは龍宮にあって供養されている。この龍宮にある舎利塔の舎利は、ラーマガーマが獲得した舎利である。また、仏の四牙も四分されたが、その一つもラーマガーマの海龍王の宮殿にある。後にアショーカ王は、七つの舎利塔を開いて、八万四千の塔を造った。(6)

このように、龍は、釈尊の生涯の重要な場面に登場し、釈尊を守護し、仏教を信奉するものとして画かれている。

（一）の釈尊誕生時における灌水は、種々の経典に説かれているが、成立年代の比較的古い経典には龍王は登場しない。(7) 釈尊の偉大さを表現するために、その灌水には水の支配者である龍王が選ばれたのであろう。

（二）の乳粥供養の鉢の争奪は、水の支配者である龍と天の代表者として帝釈天を登場させることによって、その鉢の尊貴なことが表現されている。

（三）の尼連禅河の龍は、過去仏の成道を目撃してきたことが説かれており、龍の寿命が長大なものとして考えられていたことがうかがえる。

（四）のムチャリンダ龍王の庇護は、各種の律に説かれ、このムチャリンダ龍王を表現した図像も存在し、また法顕や玄奘もこのムチャリンダ龍王について言及しており[8]、古くから知られていた龍王である。

（五）の舎利八分の話は『阿育王伝』や『大唐西域記』にもみられ、そこでは、アショーカ王でさえも、ラーマガーマの舎利塔は龍王たちに守護されていたので、開くことができなかったと伝承されている[9]。

二、龍王による聖なる遺物の出現

根本説一切有部の律の中には、龍が釈尊の意向を知って、地中や河から聖なる遺物を出現させるという話がある。

（一）大声王の宝幢

ガンジス河を渡りおわって、釈尊は遥かに高原を見ながら、そこにかつて大声王が建てた巨大な宝幢があり、この宝幢に広く財物を施して功徳をつみ終えると、ガンジス河に捨てられたことを阿難に説く。そして、釈尊はこの宝幢を比丘たちに見せようとし、施無畏手で地を触る。それを見た諸龍は、釈尊が宝幢を比丘に見せようと欲しているのだと知り、地中から宝幢を捧げ出した[10]。

（二）迦葉仏の全身舎利

トーイカー（toyikā）の町で、農耕をしていたバラモンが遠くに釈尊を見かける。バラモンは、世尊のところに行って礼拝もしたいし、農耕も続けたいと考え、耕作しながら遠くに釈尊を見ながら礼拝した。

これを見た釈尊は、あのバラモンは間違っている、今この場所には、迦葉仏の全身舎利が損なわれることなく現存している。もしここに来て礼拝すれば、二仏を礼拝したことになるのにという。そして、比丘たちに迦葉仏の全身舎利を見せようと世間心を起こす。龍は釈尊の意を知ると、迦葉仏の仏舎利を捧げ持って、虚空の中にお[11]いた。

（三）　大蓮華上での説法

無熱悩池において、釈尊が比丘たちの過去世の業を語ろうとする。そこで釈尊が世俗心を起こすと、ナンダ・ウパナンダ龍王は釈尊の意向を知り、池の中から、大蓮華を化して出してくる。その蓮華は車輪のように千葉あり、色は天の金の如く、茎は宝ででき、蘂は金剛で作られ、無量の花がまわりを囲んでいた。この大蓮華の花上[12]に釈尊は座り、また諸比丘もそれぞれ一蓮華に座った。

（四）　舎衛城の神変

舎衛城に釈尊が住しているとき、六師外道は釈尊と神通力を競おうとやってくる。勝光王は、釈尊に大衆のために無上の大神通を起こして外道を降伏してくれるようにと請う。釈尊はこれを受けて、施無畏手によって地面を触り、世俗心を起こして、諸龍が大蓮華を持ってくることを念じた。龍王は釈尊の意向を知ると、車輪のように千葉に満ち、茎は宝ででき、蘂は金剛で作られた蓮華を地より出した。釈尊は蓮華の上に座ると、周囲に無量の蓮華が出現し、その花のそれぞれに化仏が安座していた。その蓮華は色究竟天まで達し、さまざまな奇瑞を現[13]じた。

大乗仏教のなかには、龍が経典や仏鉢などの聖なる遺物を護持している伝説がある。これらの聖なる遺物も、仏教の信奉者である龍によって護持されていたものと考えられる。

三、龍王の物語

（一）ナンダ・ウパナンダ龍王

須弥山の下の大海にはナンダ龍王とウパナンダ龍王が住んでいる。この二龍王には八万四千の龍の眷属があり、四宝でできた龍宮に住み、金翅鳥にも害されることもなく、美味なる飲食を食していた。

この二龍王は、毎日三度毒気を吐き、二五〇ヨージョナ内の鳥獣をみな死なせてしまう。比丘の中にもこの龍の毒によって、皮膚が変色し憔悴してしまうものがいた。そのため釈尊はこのナンダ・ウパナンダ龍王を調伏するために、目連を使わす。

目連は、彼らより三倍の大きさの龍となって調伏して、彼らに三帰五戒を授ける。二龍王は、飯食の後の福頌伽陀（施食の福徳を呪願する偈）を説く時、我が名を称えて呪願して、悪趣を脱し善趣に生ずることを祈ってくれるように頼むと、釈尊はこれを受け入れる。これより以後、二龍王は、毎月八・十五・二十三・三十日の布薩の日に、夜は本来の姿に戻り、昼は人の姿となって、須弥山より世尊のところにやってきて八斎戒を受けるようになった。

ある時、長者の姿でやってきた龍王が釈尊から説法を聞いていると、そこへ舎衛城の王であるプラセーナジット王も釈尊を礼拝しようとやってきた。王を見た龍王は、釈尊に、法を敬って座ったまま説法を聞いていればい

いのか、王を敬い起立すべきかどうかを尋ねる。釈尊は、これに対して諸仏世尊や阿羅漢はみな法を敬うと答えられたので、二龍王は王が来ても敬わなかった。この二長者が実はナンダ・ウパナンダ龍王であることを知らない王は、自分を敬わなかったことに怒り、家臣に命じて彼らの首を切ろうとした。

これを知った二龍王の眷属たちは、驚き、怒り、雲をおこして雷や雹を降らせ、また虚空より、刀や剣や輪や槍を降らせた。その時、釈尊は目連にプラセーナジット王およびこの町の衆生を念ずるように命じる。目連はこれを受けて、これらの武器をすべて天の華に化してしまう。

この奇瑞を見た王が、その理由を釈尊に尋ねにいくと、王が二龍王の命を断じようとしたので、龍の眷属たちは怒り、刀などを降らせたので、これを目連が神通力で華に変えたことを話し、そして、王にさきの二長者がナンダ・ウパナンダ龍王であったことを明かす。

釈尊より、二龍王に謝罪せよと言われた王は、布薩の日に釈尊のところに来た龍王に謝罪すると、二龍王はこれをゆるした。目連の神通力によって自分たちを守ってくれたことに感謝して王は七日の間、すぐれた味の食事で釈尊および僧を供養した。

以上の話を釈尊が弟子たちに述べると、ナンダ・ウパナンダ龍王はなぜ畜生の世界に生まれたのか、なぜ宮殿が四宝でできているのか、なぜ八万四千の龍の眷属があるのか、なぜ金翅鳥にも害されないのかを尋ねる。

これに対して、釈尊は次のような龍王の過去世の業を語る。

迦葉仏の在世において、ナンダ・ウパナンダという兄弟の大臣がいた。二人には迦葉仏のもとで阿羅漢果を証した甥がいた。その甥は、二人の大臣に非法によって王の政治を補佐してはいけない、来世に悪報を受けてしまうと諭すが、二人の大臣は、善事だけでは国は治められないと答える。甥はそれならば、来世のために僧伽に寺

を造って施せばよいとすすめる。二人の大臣は、これを受けて大寺を作って僧伽に施し、また美味なる飲食で供養し、悩害なからしめた。

このように、この二大臣は法および非法によって王の政治を助けた悪業により畜生の世界に堕ち、また寺を造って僧伽に施したことによりその住居は四宝でできており、美味なる飲食を供養したことによって美味なる飲食を食事とするようになり、比丘・比丘尼を悩害なからしめたことによって八万四千の龍を眷属とするようになり、またたとえ金翅鳥であったも害されることがないようになった。[14]

（二）　山と妙

王舎城に山と妙の二龍王が住んでいた。この二龍王の威神力によって、王舎城の五百の温泉や池や沼は、常に流れて絶えることがなく、また甘雨が降ったので五穀豊穣であった。

さて、釈尊によって調伏されたナンダ・ウパナンダ龍王は、毎月八・十五・二十三・三十日の布薩の日に大海より妙高山に頂上に昇り、仏の所に来て供養し説法を聞きに来るようになっていた。

山と妙の二龍王は、ナンダ・ウパナンダ龍王が仏の所に来て供養するのを見て、我等も仏を礼拝しようと仏の所に行き、三帰五戒を授かる。これより以後、山と妙の二龍王は、身及び財産が豊かになる。それ故、大海に行き、広いところに住しようと考える。仏に告げると、それならば、この国の王であるビンビサーラ王に問えと言われる。二龍王は、仏はお許しになっていないようだと考えて、もとの住処に還った。

この二龍王は、もし夜中に仏に会う時は、本来の姿で現れ、もし昼に仏に会う時は長者の姿で現れた。ある時、仏のところで、二龍王は、ビンビサーラ王が来るのを見る。二龍王は、仏に法を敬えばいいのか、王を敬えばいいのかと問うと、諸仏世尊および阿羅漢はみな法を敬うと聞いて、王を敬わなかった。

王は怒りを生じて、長者の姿で現れていた二龍王に、我が国から出て行くように命じた。常に大海に引っ越すことを考えていた二龍王は、労せずして願いを遂げることができると大海に移っていった。

二龍王が去ると、王舎城の五百の温泉は枯れ、雨が降らなくなり五穀は欠乏した。王は、王舎城にいた二龍王が死んだのか、呪龍者に捉えられたのか、金翅鳥に食されたのかと思案し、一切智を具す仏にその原因を聞く。仏は、さきの二長者が二龍王であったことを話した。二龍王は現在大海にいるが、布薩の四齊日には仏を礼敬しに来るので、そのおり二龍王に陳謝せよと仏はいう。

王が二龍王に許しを乞い、我が国にまた戻って来るように頼むが、二龍王は身および財産が豊かになったので、戻って来てもいる場所がないという。

そこで、我等のためにの二つの祠堂を作れば、そこに自分の眷属を住まわせ、六月ごとに大会を盛大に行えば、その時やってきて国土に欠乏がないようにすると約束する。[15]

(三) アパラーラ龍王の因縁譚

山と妙の二龍王の眷属は、その後驕慢を生じ、雨や雹を降らせた。その時、王舎城には雨や雹に関する呪術に通達したバラモンがいて、雹が降ろうとする時には、よくその雲を取り払っており、王舎城の人々は、彼に貢ぎ物を与えていた。

その時、南天竺国にも雨や雹の呪術にすぐれたバラモンがいた。かれは北天竺国の波利迦城に孫陀羅龍王という勇猛無比な龍王が住んでいることを聞き、これを調伏しよう出発して王舎城の呪師の家に至ると、空に雲起こり、雹を降らせようとしているのが見えた。王舎城の呪師はこれを止めることが出来なかったが、南天竺の呪師は、水を少し取り、これを呪して虚空に注ぎ、その雲を散じた。

その時、王舎城の人々はこれに報いようと、王舎城の呪師に財物を贈ろうとすると、王舎城の呪師は、これは南天竺国の呪師の功績であると述べる。

すると、王舎城の人々は、財物を持って南天竺国の呪師に所にやってきて、貢ぎ物を贈るのでここに住んで欲しいと述べると、その呪師はこれを受け入れる。すなわち、南天竺国の呪師は、王舎城に住し、呪法によって悪雲を呪して雨や雹が降らせないようにした。

やがて王舎城の人々は、風や雷や雹雨が降らないのは、我等の福力によるものだと考えるようになり、南天竺国の呪師に貢ぎ物を贈るのをやめてしまった。南天竺国の呪師は、これに恨みを抱き、呪法をやめて去ってしまうと、後に雨や雹が遂に降ってしまった。

その南天竺国の呪師は、しだいに進んで勝軍城に到った。そして、その国の孫陀羅龍王の龍宮に行って、その龍の所持する霊薬を手に入れ、持ち帰り、勝軍王に分与した。

その後、南天竺国の呪師は国に帰ろうと、王舎城まで来た。王舎城に戻った呪師は、人々の請を受け入れ、再びそこに住して、家族を持った。そして雹が降るたびに呪法を行うのは疲れるからと、呪法によって永く雹が降らないようにした。

雨雹が絶えると人々は、また、王舎城の人々は、風や雷や雹雨が降らないのは、我等の福力によるものだと考えるようになり、南天竺国の呪師に貢ぎ物を贈るのをやめてしまった。

南天竺国の呪師は、享楽にふけり、勤修もしなくなり、薬物も朽ちてしまい、ついに呪術も忘失してしまった。そして王舎城の人々に恨みを懐く呪師は、自分の望みをかなえる法を求めて竹林精舎までやってくる。

そこで、ある比丘より四大声聞に供養すれば、求めるものがすべて得られると聞き、四大声聞に供養をする。

そして、孫陀羅龍王を滅没させ、かわりに自らがその宮殿に生を受け、また王舎城の人民を損害しようと発願する。呪師の家族もみな龍宮に生まれることを発願する。

その夜、五色の雲が現れ、大雨が降り、呪師とその家族は滅没し、願力によって龍宮に生じ、もとから住していた孫陀羅龍王を駆逐し、その宮殿に住した。そして龍王となった呪師は、マガダ国に雹を降らして苗に被害を与え、大雨を降らして根果をことごとく流してしまった。

マガダ国の人々は、この龍王が、稲稈（palāla）さえもすべてのこさないように至らしめたので、無稲稈（apalāla）龍王と呼んだ。[16]

（四）化龍比丘の因縁譚

ある龍が生まれてすぐに金翅鳥に捉えられた。そして空中に至ると、そこから龍は比丘が諸根寂静にして端座入定しているのを見て、帰依の心を生じた。その龍は死後、バラモンの家に生まれると、出家してついに阿羅漢果を得た。

もと龍であった比丘は、龍宮で、過去世の父母がわが子を亡くしたことで悲歎しているのを見て、神通力で龍宮まで行く。そしてその比丘は自分が子供であることを明かす。以後、毎日比丘は龍宮にやってきて、美味の飲食を受けるようになる。

ある時、比丘の弟子の沙弥は、こっそりと師匠の衣の耳をつかんで、一緒に龍宮までやってきた。龍は、比丘に天食を、弟子に凡食を施す。二人の食の味が違うことに気づいた弟子の沙弥は瞋恚して、「私は迦葉仏のところで出家して梵行を修習す。この功徳によって願わく大威徳の龍神を得ることを。この宮殿を奪って諸龍を追い出さん」と願を発す。

怒り激しく、躯命を惜しまなかったので、願を発しおわると、たちまち両手から水が流れ出し、龍となり、宮殿から諸龍を追い出して、自らその宮殿に住した。

化龍比丘とは、この諸龍を追い出した龍王のことである。[17]

（五）　妙生龍子と不空羂索

般遮羅國に二人の王がいた。一人は北界、一人は南界にいた。北の王を財という。北の王は、法によって国を修め、豊かで栄えていた。そこには大きな池があり、妙生という龍子が住んでおり、雲をおこし雨を降らせ田を豊かに実らせていた。

南の王は、非法によって国を修めていた。そこでは雨も降らず飢饉にあえいでいた。そこで南の王は、北の国に住む妙生龍子を獲得して、自分の国に持ってこようと、蛇を呪す呪師を北の国に送る。

龍子は、猟師の助けによりこの難を免れると、猟師を龍宮に招き、妙なる飲食を与え、宝珠を与えた。その後、猟師は、ある仙人から龍宮には龍の不空羂索(amoghapāśa)があることを知り、再び龍宮に行き、羂索を求めた。

龍は、この羂索は金翅鳥を恐れ、自分を防御するために所持していると答える。猟師は、龍が羂索を使うのは、永いあいだに一度だけであるが、私には、常に必要であると述べる。龍子は、ついに不空羂索を猟師に与えた。[18]

（六）　ナンダ・ウパナンダ龍王の侍者

目連がバラモンの舅を調伏しようと、神通力によって大風雨をおこす。その時、ナンダ・ウパナンダ龍王の侍者は、「聖者目連は、常にナンダ・ウパナンダ龍王によって敬われていた。我もまた彼を供養しよう」と考え、本宮より出てきて目連のところに至って、身体を七重に目連を右遶し、その首で目連の頭を覆って住した。

これを見た目連の舅は、目連に教化され、仏を礼拝して、出家した。

その龍は、目連が去ると、独り住して不安でいると、聚落に旱魃がおこった。龍は、身を化して仙人となり、目連の舅が住していたところで坐禅して住した。人々がやってきて、旱魃をどうすればよいかと仙人に化した龍に聞くと、かれは、「汝等が共にここに来て住すれば、災いはなくなるであろう」と述べた。

その龍が目連のために蓋を持ったことにちなんで人々は、そこを龍持蓋城と称した。また信心ある優婆塞は、その龍が蓋を持った場所に寺舎を建立した。[19]

（七）　エーラパトラ（elapatra）龍王

兜率天の宮殿に、仏の言葉の偈頌が掛けられていたが、誰もその意味を理解するものがいなかった。エーラパトラ龍王は、この言葉を伝え聞いて、その意味を理解する人を捜して諸国を遍歴する。ヴァーラーナシー国の那刺陀は、この偈頌を聞いて、七日の猶予をもらって、親友の比丘を訪ねる。比丘より仏が世に出たことを聞くと、那刺陀は仏を訪ね、親しく偈頌の意味を聞く。そして龍のところに行き、偈頌の意味を答え、また仏が世に出たことを述べる。

これを聞いた龍は、転輪聖王の姿に化して釈尊のところに行く。龍王がもとの姿に戻ると、七つの頭があり、その大きさはヴァーラーナシー国からタクシャシラー国まであり、その姿は醜くかった。釈尊は龍に、弥勒如来の時代に、龍身を免れるであろうと授記を与えた。そして大衆には、その龍が前世の因縁によって龍として生まれたことを説いた。[20]

（一）のナンダ・ウパナンダ龍王の因縁譚は、根本説一切有部の波羅提木叉のうち、波逸提法の第八十二条の入王宮門学処に説かれる物語である。[21] このナンダ・ウパナンダ龍王は、目連によって調伏されたことによって仏

教信者となり、布薩に訪れるようになる。そのとき、龍は昼は長者の姿でやってきて、夜は本来の姿でやってくると説かれており、龍が人の姿に化すことができると考えられていた。龍が夜には本来の姿に戻るというのは、龍の原イメージであるコブラが夜行性であることに由来するのかもしれない。またこの物語には、王によって危害を加えられようとして怒った龍王を鎮めるために、王が謝罪する場面があり、王であっても龍に危害を加えるならば災いがおこると考えられていたのであろう。このナンダ・ウパナンダ龍王は、過去世の悪業により畜生に生まれことが説かれており、龍は畜生であることがわかる。また二龍王は、過去世の善業により四宝でできた宮殿を住処とし、美味なる食べ物を食していたことが説かれている。

（二）の山と妙の物語にも、（一）と同様に、王によって危害を加えられようとして龍王が怒り、それを鎮めるために王が謝罪することが説かれいる。この物語からは、龍王を祀ることによって国土に雨が降り五穀が豊かに実るが、もし龍を祀らなければ国土に災いがあるという信仰があったことをみることができる。また、仏教がこのような龍に対する信仰に対して、その龍さえも釈尊や仏弟子は調伏することができると説くことによって、仏教の偉大さを示したともいえる。

（三）のアパラーラ龍王は、後に述べるように金剛手に降伏される龍として知られている龍王である。人々が貢ぎ物を贈らなくなったことに恨みを懐いた呪師が、作物を害するアパラーラ龍王となる話は、『大唐西域記』[22]にも説かれている。

（四）には、龍になりたいと願を発して、龍になってしまう者の話が説かれている。通常では、畜生に生まれることを望む者は考えられないが、このように龍に生まれることを願う者が登場しているのは、龍の雨を支配する力や威神力や財宝が人々に望まれていたことの反映であろう。

（五）にも（二）と同様に、龍王が雨が降らせることによって五穀は豊かに実り、国が繁栄することが説かれている。またこの龍は不空羂索（amoghapāśa）を所持していることが説かれている。密教では変化観音の一つの不空羂索観音の持ち物が不空羂索であり、興味ある記述である。

（六）にはナンダ・ウパナンダ龍王の侍者が、目連を供養することが説かれている。ムチャリンダ龍王が七重にとぐろを巻いて、雨から釈尊を庇護したように、この物語でも、龍が七重にとぐろを巻いて目連を庇護した。

（七）のエーラパトラ龍王は、仏語を理解する人を求めて諸国を遍歴し、釈尊のもとに至って帰依し、釈尊により弥勒如来の時代に龍身を免れることを授記されている。このエーラパトラ龍王は、古くから知られていた龍王であり、『五分律』『四分律』『仏本行集経』『大唐西域記』などにも説かれ、パールフットには、エーラパトラ龍王の礼仏の図像が残されいる。[23]

四、龍王調伏

（一）ウルヴィルヴァー・カーシャパの毒龍

釈尊がウルヴィルヴァー・カーシャパに、火堂に宿をとりたいと述べる。ウルヴィルヴァー・カーシャパは、その石室には毒龍がいると答えるが、釈尊は、この龍は私を損なうことはできないとその火堂に入っていく。これに怒った毒龍は、毒煙を吐くが、釈尊は神通力によって口より煙を吐きこれを防いでしまう。ついで龍は全身より火を出すと、釈尊は火光三昧に入り、身より火を出す。さらに三昧に入って種々の火光を出すと、毒龍は恐怖して、ついに世尊に調伏され鉢に入れられてしまった。[24]

（二）アパラーラ龍王の調伏

釈尊は金剛手薬叉とともにアパラーラ龍王の住処に行く。釈尊が龍王の宮殿に来ると、アパラーラ龍王は怒り、雹雨を降らす。しかし釈尊は、これを種々の香に変じてしまう。龍王がさらに輪などの武器を降らすと、これも釈尊は四色の蓮華に変え、龍王が煙雲を放つと釈尊も神通力で煙雲を放つ。

そして金剛手は、金剛杵によって山を撃破して龍王の池を半分覆ってしまう。恐怖した龍王が逃げようとすると、釈尊は火界定に入り、十方に炎を燃やし、龍王の退路を無くして、龍王を調伏した。

そして、三帰と清浄戒を釈尊はアパラーラ龍王とその眷属たちに授けた。[25]

（三）　アシュヴァカとプナルヴァスの調伏

阿濕縛（aśvaka）と布捺婆素（punarvasu）は、釈尊が我等に説法しなかったので現在悪趣に堕ち、龍の姿になってしまったと考え、仏教を破壊しようと考えた。

その時、釈尊は、この二毒龍は大威力があるため、私の滅後、我が教えを破壊し灰塵に帰してしまうであろうと考え、池に行って、二龍に対して、有足経を説こうと述べる。二龍は我等は龍身であるので、世尊が我等に説法しようとも、我等は理解できないと考えた。

そこで、世尊は、その池のところに、自らの影像を留めた。龍が仏の影を見るとしばしば出現して、世尊がまるでそこに住している如くであった。[26]

（四）　善来比丘による菴婆毒龍調伏

釈尊は、人々に軽んぜられていた弟子の善来の徳を顕彰しようと欲して、善来に失収摩羅山の菴婆毒龍の調伏を命ずる。善来はこの釈尊の命を受けて毒龍のところに行く。毒龍は怒って、雲をおこし雷や電を降らす。すると善来はそれらを種々の香に変じてしまう。さらに毒龍は剣や輪などを降らすが、善来はこれも蓮華に変えてし

まう。龍が煙を放つと善来も煙を放ち、また龍が火を放つと善来も火光定に入り、大火をおこして龍宮とその周遍を火焔で充たしてしまう。

毒龍はついに善来を礼拝して助けを求める。善来は、龍に対して、前世において悪業を作って傍生に堕ちたのに、今また不善をなせば必ず地獄に落ちるだろうと説く。そして、三帰、五戒を授けた。

善来が毒龍を降伏したことを釈尊に報告すると、釈尊は諸比丘に「私の弟子声聞の中で、毒龍を降伏すること善来が第一である」と告げた。

その後、毒龍降伏に成功した善来は、父の旧友のバラモンより供養を受けることになる。バラモンは消化をよくしようと思い飲物の中に酒を入れていた。善来をそれを知らず飲んでしまい酔ってしまった。これにより、不飲酒戒が制せられることとなる。[27]

（五）　カシミール国の龍の調伏

釈尊よりカシミール国に仏教を流通させることを付嘱されていた尊者日中が、龍によって守護されているカシミール国に行く。そして尊者日中が、かの地の忽弄という龍を調伏するために、禅定に入って大地を六種に震動させる。龍は怒って、雷や雹を降らしたり、刀や斧などの武器を降らすが、尊者日中はこれを華に変えてしまう。

龍を調伏した尊者日中は、釈尊が自分に対して「この地に住するように」と記別し、また「カシミール国は房舎や臥具が求めやすく禅定と最も相応した場所である」と語っていたことを龍に述べ、龍より五百人の阿羅漢が居住する処をもらい受ける。

そして、人々がカシミール国にやってくると、彼らは尊者日中に生活を支え補うにはどうすればよいのかと問う。そこで尊者日中は、人々をひきいて香醉山に行き、かの地の龍を調伏して、鬱金香の根が欲しいことを述べ

る。龍が「如来の教法は幾ばく住するのか」と問うと、尊者日中は「世に千年住する」と答える。龍が「如来の教法が続くかぎり、随意に用いよ」と約束すると、尊者日中たちは鬱金香の根を手に入れ、カシミール国に植えて繁殖させた。[28]

（一）は事火外道のウルヴィルヴァー・カーシャパの火堂に入った釈尊が、毒龍を降伏し鉢に入れてしまう。釈尊がすぐれた神通力を縁として、三迦葉は仏教に帰依するようになる。

（二）のアパラーラ龍王降伏の記事は、『雑阿含経』『阿育王伝』『大智度論』にも説かれる。この場面を表す図像はガンダーラ地方に多数見られる。また玄奘は烏杖那国のミンゴーラにあるスワート河の水源にアパラーラ龍王の泉があり、そこで金剛手とともにアパラーラ龍王を降伏したことを伝えており、西インドとつながりが深い龍王である。[29]

（三）は毒龍のために、釈尊が自分の影像を留める話である。これと類似した話に玄奘による仏留影窟の記事がある。すなわち、ガンダーラにおいて、釈尊はゴーパーラ龍王を降伏し、洞窟に自分の姿を留めたというものである。[30]

（四）の善来比丘による菴婆毒龍調伏は、根本説一切有部の波羅提木叉のうち、波逸提法の第七十九条の飲酒学処に説かれる物語である。[31] 善来比丘が毒龍を降伏し、そのために酒の供養を受けて酩酊する趣旨の話は、パーリの律、『四分律』『五分律』『摩訶僧祇律』『十誦律』の各種の波羅提木叉の飲酒を禁ずる学処に説かれている。

（五）は、西インドのカシミールを開教するにあたって、仏弟子の日中が龍を降伏する。（一）（二）（三）（四）で降伏の対象となる龍は、みな人々に危害をおよぼす毒龍であるが、この（五）に登場するのはこのような毒龍

というよりもカシミールで信奉されていた龍である。龍信仰がさかんな西インドにおいて、龍信仰を取り込む形で仏教が進出していったことを示しているのであろう。

五、龍にもとづく制戒

（一）　龍より衣料を乞うことを制する

龍に衣料を乞えば悪作罪である。得てしまえばすなわち捨堕である。もし、比丘が使いを行かせて、あるいは書状によって乞えば悪作罪である。得てしまえばすなわち捨堕である。[32]

（二）　龍肉を食するのを制する

チャンパー城のガンガー仙人池にチャンパー龍が住んでいた。その龍は信心があり、月の八・十四日に龍宮から出て人の姿になって、比丘の処に行って、八斎戒を受けていた。

ある時飢饉があり、人々は龍の肉を食した。六衆比丘も長者の家で龍の肉をもらった。その時、龍の妻は、夫の肉が食されるにより、苦痛をおぼえ、仏に、比丘が龍肉を食するのをやめることを制するように頼む。

これにより、釈尊は、龍肉を食するものは越法罪であると制した。[33]

（三）　安居の後の随意（pravāraṇa）

龍の住処の近くでは、比丘が龍の住処を汚すことによって龍が怒って毒虫を放って比丘を損なうおそれがあるので、三説すべき随意を一説でもよい。[34]

（四）　毛縄で龍を縛ることを制する

龍がもとの姿のままで説法を聴聞に行くと、これを見た比丘たちは恐怖して、その龍の首を毛縄で縛って、寺

の外に投げた。龍はこれによって首が傷ついてしまった。その龍の母が、このことを釈尊に告げると、釈尊は、毛縄で龍を縛ってはいけないと制する。[35]

（五）　僧園彩画法

給孤独長者が僧園を施した後、僧園を彩画する法を尋ねると、釈尊は次のように答える。

「門の両頰には執杖薬叉を画き、傍らの一面に大神通変を画き、また一面に五趣の生死の輪を画き、簷の下には本生譚を画き、仏殿の門の傍らには持鬘薬叉を画き、講堂には老宿の比丘が説法するところを画き、食堂には持餅薬叉を画き、庫の門の傍らには執宝薬叉を画き、水堂には水瓶を持ち妙なる瓔珞を着けた龍を画き、浴室火堂には天使経の法式や地獄変を画き、瞻病堂には如来が自ら看病するところを画き、大小行処には恐ろしき死屍を画き、房内には白骨の髑髏を画け」[36]

（一）は、根本説一切有部の波羅提木叉のうち、捨堕法の第十条の過限索衣学処に説かれる。[37]この学処は、檀越が衣料を布施してくれた場合、比丘はそれを執事人に預けておき、比丘が衣を必要とする時にその衣料によって衣を入手してもらうが、執事人の都合を無視して強引に衣を入手させることを禁ずる学処である。この時、衣料を布施する檀越が非人であってはならないというのがこの学処の条文解釈のなかに説かれており、その一例として龍があげられいる。

（三）は、安居の最終日に行われる随意（pravāraṇa）に関する規定である。この日に安居に参加した比丘が全員集まり、安居の修行中のことを互いに反省し自分の犯した罪過を告白懺悔することで、随意あるいは自恣と訳す。

（二）（四）に説かれる龍は、何を意味しているのか明らかではない。蛇のことを龍とよんでいるのであろうか。

（五）は、僧園を彩画する方法を述べたものである。水堂に龍を画くべきことが説かれているのは、龍が水をつかさどることに基づいている。

六、龍王に関する種々のエピソード

（一）蛇毒を免れる伽陀と禁呪

小軍比丘が蛇毒により亡くなってしまった。このことを舎利弗が釈尊に報告すると、釈尊は、蛇毒を免れる伽陀と禁呪を誦えれば、蛇毒に害されることがなかったであろうと答え、比丘たちのために蛇毒を免れる伽陀と禁呪を次のように説いた。

「我、持國主及び曷羅末泥、緝婆・金跋羅において咸悉く慈念を生ぜん。
喬答摩・醜目、難陀・小難陀、無足・二足等にも亦慈念を起さん。
一切諸龍の水に依りて居する者、行住の有情類に於いて我悉く慈心を起さん。
一切人天衆、神鬼及び傍生、咸く皆利安を獲て、無病にして常に歡喜せん。
見る所皆賢善にして諸怨悪に遇わず、我悉く慈念を興さん。毒害相侵すこと勿れ。
我崖谷の險、一切處に遊行する齧毒及び害毒も常に相忤嬈することなかれ。
世尊大慈父は、所有る眞實言す。我佛語を説くが故に、諸毒は我を侵すこと勿れ。
貪欲・瞋恚・癡は世間の大毒爲り。佛の眞實語に由りて諸毒は自ら銷亡せん。
貪欲・瞋恚・癡は世間の大毒爲り。法の眞實語に由りて諸毒は自ら銷亡せん。

貪欲・瞋恚・癡は世間の大毒爲り。僧の眞實語に由りて諸毒は自ら銷亡せん。
諸毒害を滅除して、擁護して攝受せよ。佛は一切毒を除く。蛇毒よ。汝銷亡せよ。
怛姪他　菴　敦鼻麗　敦鼻麗　敦薜　鉢利敦薜　捺帝　蘇捺帝　雞捺帝　牟柰裔　蘇牟柰裔　彈帝　尼攞
雞世　遮盧計薜　嗢毘盈具麗　莎訶」[38]

（二）　龍の珠

ある仙人が龍に巻かれて困っていた。すると別の仙人が龍の頂には珠があるので、それを乞えば、龍は惜しむが故に去って行くだろうとアドバイスする。その仙人が龍に珠を乞うと、龍は去って行った。[39]

（三）　黒者龍王と憍曇摩龍王

黒者龍王、憍曇摩龍王の二龍王が、蘇波羅城に釈尊の説法を聞きに行こうとする。二龍王は、五百の眷属とともに、龍の威力によって五百の河を化現して趣いた。世尊は、二龍王が蘇波羅城を破壊するのではと考え、龍王の処に行く。龍王は、善心をもって行き、蟻すら傷つけず、まして蘇波羅城や有情を傷つけようとは思っていないと答える。

釈尊の処にやってきた龍王に、釈尊は説法して、三帰・五戒を授けた。龍王は、仏の食事を見て、仏が先に自分の食事と水を受けてくれればと考える。世尊は、五百の龍王から一々に水を受けることはできないので、方便をなそうと考え、目連に命じて水を取ってこさせてこれを飲んだ。[40]

（四）　龍の橋

マガダ国阿闍世王とヴァイシャーリーのリッチャヴィー族は、それぞれ橋を造った。この時、諸龍は、次のように念じた。「我は今、悪趣に堕ちている。まさに福業を修めよう。それぞれガンジス河に頭を挙げて、相続し

て橋とし、世尊たちにその上を渡ってもらおう」。このように念じて、諸龍は、それぞれ頭を挙げて、相続して橋とした。

その時、世尊は、比丘たちに告げた。「汝等の心に随い、この三つの橋のいずれかを渡れ。我は、阿難陀と龍の橋を通って、ガンジス河を渡ろう」。

弟子たちは、阿闍世王の橋、あるいはリッチャヴィー族の橋を通った。ただ世尊とアーナンダのみが、龍の橋を渡った。[41]

（五）　真実語による請雨

かつて三螺という名のマータンガ族の王がいた。彼は真実語によって雨を降らし、それによって国は豊穣であった。王は後に出家して仙人に随って五神通を得た。

この時、ヴァーラーナシー国は飢饉に苦しんでいた。そこで今は仙人となった三螺という名のマータンガ族の王を招聘し、真実語を発してくれるように頼む。

そこで、その仙人は、次のように真実語を発した。

「我、旃陀羅に生在し、また悪心損害の意なかりき。
三螺の所説をあまねくまさに知るべし。諸々の天および人は皆悉く見よ。
かくの如く我今、真実語す。慈心を熏修して久しく行ぜるは、
あまねく法界の衆生の為なり、願わくは龍、雨を降らして飢えた人を済え。
生まれてから已来の所修の善、久しく慈心を習い、哀愍の故に、
この無量の真実語を以て、龍、まさに雨を降らして衆生を救うべし」

これによりヴァーラーナシー国には雨が降って豊穣となった。そして釈尊はこのかつての三螺という名のマータンガ族の王は自分であったことを明かす。[42]

（一）では、蛇の毒を免れるために龍に対して慈心を発すことが説かれており、龍が毒蛇であるコブラのイメージに重ねられている。なお、このエピソードに説かれる伽陀と禁呪、およびそのモチーフは、密教経典の『孔雀明王経』に受け継がれる。[43]

（二）には、龍が珠を所持していることが説かれている。ジャータカ、仏伝や大乗経典にも龍が如意宝珠を所持することが説かれおり、これは龍の財産が豊かであり珍宝を所持していることを示している。また、これに関して、ナーガと呼ばれたコーリヤ族の末裔と考えられるコール族の墓制では、遺骨とともに装身具や副葬品を埋めることとの関連性が指摘されている。[44]

（三）と（四）からは、龍の仏教への信仰心が厚いことがうかがえる。

（五）の真実語とは、「真実の言葉を発することによって何らかの目的、それも通常では実現不可能なことをなしとげようとすもの」であり、「「真実」そのものの中に秘められていると信ぜられる力によってきわめて現実的な欲望を処理しようとするもので、この意味で呪術の一種である」と指摘されている。[45] ここでも、雨を降らせるという呪術的行為のために、自らの慈心を修したという真実が語られている。そして龍に雨を降らすことを祈っており、龍が雨を支配しており、請雨の呪術と龍が結びつけられている。さきほどの（一）は龍が毒を持つという属性に対する呪術に対して、この（五）は龍が雨を支配するという属性に対する呪術である。

まとめ

龍には適宜に雨を降らして五穀豊穣をもたらす龍もいる一方、大雨や雹を降らしたり毒を吐いて人々に危害を加える毒龍がいる。このように龍には、善龍の側面と毒龍の側面の相反する性格がみられる。このような相反する性格は、龍の原イメージであるコブラにみることができる。コブラはその猛毒により、人々に危害を加える。しかし、またコブラをはじめとする蛇は、農業に被害を与えるネズミなどを捕食することにより人々に利益をもたらすという側面もある。このような善悪の二種の側面が龍にも反映されているのであろう。

また人々が龍を祀ることによって、龍は恵みの雨をもたらすと考えられていた。もし、王や人々が龍を祀ることなく、龍に危害を加えるならば、龍は怒り大雨や雹を降らす。また龍が去ってしまった国では旱魃がおきてしまう。

龍と仏教のかかわりにも善悪の二種の龍の性格が反映されている。仏教の信奉者として登場する善龍がいるかたわら、一方では釈尊や仏弟子により降伏される毒龍もいる。善龍には、釈尊の生涯の重要な場面に登場して釈尊を擁護し仏教の信奉者として登場する龍や、また聖なる遺物を護持する龍、また布薩に来て八斎戒を受ける龍などがいる。一方の毒龍は、釈尊や仏弟子によって降伏されるものとして説かれる。龍は神通力によって最初は抵抗するが、釈尊や金剛手や仏弟子の卓越した神通力によって降伏される。そして、降伏された龍は、三帰五戒を受け、仏教の信奉者となるのが毒龍降伏譚の典型である。

また龍に関する呪術にも、蛇毒を免れる呪術と降雨を祈る二種の呪術がみられる。前者の蛇毒を免れる呪術は、龍が毒を持つという属性に由来し、この呪術は密教経典の『孔雀経』へ展開していく。また後者の降雨を祈る呪

術は、龍が雨を支配するという属性に由来する。そしてこの龍が雨を支配するという考えは、やがて『請雨経』などの密教経典に受け継がれ、龍を勧請して降雨を祈る呪術となっていく。

註

（1）宮坂宥勝『宮坂宥勝著作集　第一巻　仏教の起源』法蔵館、一九九八年、p.412-443°

（2）『根本説一切有部毘奈耶破僧事』大正蔵二四巻108a°。また『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻298a°

（3）『根本説一切有部毘奈耶破僧事』大正蔵二四巻122a, *'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.nga, 27a-27b°

（4）『根本説一切有部毘奈耶破僧事』大正蔵二四巻122c, *'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.nga, 28a-29b°。また『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵二三巻717a、大正蔵二三巻911a、大正蔵二三巻948b、『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻299c、『根本説一切有部毘奈耶出家事』大正蔵二三巻1026c°

（5）『根本説一切有部毘奈耶破僧事』大正蔵二四巻125c-126a、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.nga, 37b-38a°

（6）『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻402b, *'dul ba phran tshegs kyi gzhi*, Toh.No.6, vol.da, 300b°

（7）宮坂、前掲書、p427°。静谷正雄「インド仏教史とナーガ」『龍谷史壇』第七三・七四号、一九七八年。門川徹眞「佛傳における龍王灌仏について」『印仏研』第一六巻第一号、昭和四二年。

（8）静谷、前掲書、p137°。入澤崇「ナーガと仏教」『密教図像』第六号、昭和六三年、P39-49°

（9）入澤崇、前掲書。杉本卓洲「ナーガと仏塔」印度学仏教学研究24-2、昭和五一年。

（10）『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻23c-24a、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 29a-29b°

（11）『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻53a、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 159b-160b°

（12）『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻76c、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 282a°

（13）『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻332b, *'dul ba phran tshegs kyi gzhi*, Toh.No.6, vol.da, 50b°

（14）『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵二三巻866c-869b、*'dul ba rnam par 'byed pa*, Toh.No.3, vol.nya, 76b°

（15）『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻17a-18b、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 8a-10b°。また『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵二三巻842c-844a

（16）『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻18b-21c、*'dul*

ba gzhi, Toh.No.1, vol.kha, 10b-13a。

(17) 『根本説一切有部出家事』大正蔵二四巻1038b、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.ka, 117a-119b。

(18) 『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻59b-60b、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 202b-206a。

(19) 『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻37a-c、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 98b-99b。

(20) 『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻303a-304c、*'dul ba phran tshegs kyi gzhi*, Toh.No.6, vol.tha, 278a。

(21) 平川彰『平川彰著作集　二百五十戒の研究Ⅳ』(春秋社、一九九五年)の「波逸提法　第八十三条　突入王宮戒」にあたる。王の後宮に断りなく比丘が入ることを禁ずる学処である。

(22) 静谷、前掲書、p138。

(23) 静谷、前掲書、p137。入澤、前掲書、p44。

(24) 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』大正蔵二四巻131a-b。*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.nga, 56a-57a。

(25) 『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻40b-c、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 118b-119b。

(26) 『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻41a、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 120b-121a。

(27) 『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵二三巻858c、*'dul ba rnam par 'byed pa*, Toh.No.3, vol.nya, 28b。また、『根本説一切有部　芻尼毘奈耶』大正蔵二三巻994a。

(28) 『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻411a-b、*'dul ba phran tshegs kyi gzhi*, Toh.No.6, vol.da, 322a。

(29) 静谷、前掲書、p138。

(30) 静谷、前掲書、p139。

(31) 平川彰『平川彰著作集　二百五十戒の研究Ⅲ』(春秋社、一九九四年)の「波逸提法　第五十一条　飲酒戒」にあたる。飲酒を禁ずる学処である。

(32) 『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵二三巻735b、*'dul ba rnam par 'byed pa*, Toh.No.3, vol.cha, 126a。また『根本説一切有部　芻尼毘奈耶』大正蔵二三巻957c。チベット訳では、非人が説かれるだけで、龍の記述はない。

(33) 『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻5a-b、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.ka, 288a-289b。

(34) 『根本説一切有部毘奈耶随意事』大正蔵二三巻1047a、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.ka, 231a-231b。

(35) 『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻271a、*'dul ba phran tshegs kyi gzhi*, Toh.No.6, vol.tha, 188a。

(36) 『根本説一切有部毘奈耶雑事』大正蔵二四巻283a、*'dul ba phran tshegs kyi gzhi*, Toh.No.6, vol.tha, 225b-226a。

(37) 平川彰『平川彰著作集　二百五十戒の研究Ⅱ』(春秋社、一九九三年)の「捨墮法　第十条　過限索衣戒」にあたる。

(38) 『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵二三巻657a-b、*'dul ba rnam par 'byed pa*, Toh.No.3, vol.ca, 125b-126b。

(39) 『根本説一切有部毘奈耶』大正蔵二三巻854c、*'dul ba*

rnam par 'byed pa, Toh.No.3, vol.nya, 5a。

(40)『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻15c-16a、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 4b-5b。

(41)『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻23c、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 28b-29a。

(42)『根本説一切有部毘奈耶薬事』大正蔵二四巻58b、*'dul ba gzhi*, Toh.No.1, vol.kha, 193b-194b。

(43) 伊原照蓮「小乗呪と密教経典」『智山学報』第六輯、昭和三二年

(44) 杉本卓洲、前掲書、p566。

(45) 奈良康明「真実語について―仏教呪術の一側面」『日本仏教学会年報』三八号、昭和四八年。